

---

# 零崎幽識の人間捕食

零岬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

零崎幽識の人間捕食

### 【Nコード】

N2108L

### 【作者名】

零岬

### 【あらすじ】

零崎軋識はとある学校の一室で血に染まっていた少年――零岬試幽に出会う。その少年はあまりにも《異状》だった……。

キャラが崩壊してたり話が変わってたり死んだキャラが生きてたりします。

初投稿ですのでグタグタになっているかもしれないです。

## プロローグ

（プロローグ）

「んじゃ俺は殺人鬼って訳か。」

「そう言う事だっちゃ。」

この二人がいるこの部屋はとある学校の一室。

しかしこの部屋は今現在血の海が広がり真っ赤に染まっていた。

「しかし、流石にこれは惚ればれするくらいの手際によさっちゃね。」

「お褒めいただき光荣ですよ零崎軋識さん。」

するとその男 - 零崎軋識は少し笑みを浮かべながらその殺したであろう人達の血で染まった少年を見た。

「おや、俺の事知ってるっちゃか。零岬試幽（ほのみなぎしゆう）」

「ああまあ《愚神礼賛》「シームレスバイアス」と言ったらなかなかこつちでは有名だから。しかしあんたもよく零岬なんか知ってるな。あんなマイナーな殺戮集団。」

そついいながらその少年 - 零岬試幽は笑った。

「しかし得物はカッターだけで…どうやって首とか跳ねたっちゃ？  
あとその首は何処やったっちゃ？」

「いや？跳ねてないただ食っただけ。」

「はい？」

「いや、だから美味しくいただきました。ごちそうさま。」

流石にあの《愚神礼賛》 零崎軋識もこれは引いたらしい。

「正気か？」

「はい。」

零岬試幽はまるで当たり前の事を肯定するかの様に答えた。

「…まあいいか。時間もなしし後で詳しく聞くか…」

「軋識さくん口調が。」

「えっ！…ああまたやっちゃったっちゃ。」

すると試幽はクスリと笑った。

「その口調やめたほうがいいですよ。なんか変。」

「ほっとけ。」

「それで？用事があって来たんじゃないんすか？」

「ああ、そおだつちや。…俺の家賊にならんかつちや？」

「まあいいけど？別に」

「いや、こちらから誘ってなんだつちやが、もうちつと葛藤とかあつても…。」

「いや？俺も家族…じゃなかった家賊が欲しかったし。」

「…まあいっつちや寧ろ話はやくて助かるつちや。名前は零崎…  
…幽識、零崎幽識でどうつちや？」

「幽識か…いいぜ。軋識兄さん。」

「それじゃあやまずレンに紹介しないと…。」

「その前に軋識兄さん頼みがある。」

「なにっつちや？」零岬試幽もとい零崎幽識が雑巾片手に言ってきた。

「掃除手伝つてくんね？」

深夜1時過ぎ。

「つたくお前はどんだけ派手に散らかしてるつちや！」

「仕方ねえでしょ人間って首齧ると血が勢いよく出てくるから広範  
困に広がるの！」

「だったら齧るなつちや！」

「んじゃどうやって喰うんだよ！」

そのまま2人は教室を朝方まで綺麗に後片付けをする事となった。

## 始まり

「いやーしかしこんな所で人識に会うとはね。」

「俺も思つて無かつたよ幽識さんよお。」

今この2人の殺人鬼――零崎人識と零崎幽識は電車のある1両で向かい会つて座っている。

しかし不思議な事にこの2人以外この車両には誰もいない。まるでここだけ空間が切り取られた様な感じさえする。

「お前もたまには双識兄さんとかに会いに行つてやれよ。寂しがつてるぜ?」

「いつか兄貴をぶつ殺して《自殺志願》もらいに行くから嫌でもいつかは会つのに何でわざわざ用もないのに会いに行かなきゃなんねーんだ。」

すると幽識はクスクス笑つた。

「なんだよいきなり笑い出して?」「いや?ただ相変わらず人識君はツンデレだなあ〜つて」

「…お前は兄貴の次に絶対殺す。」

「やつだね。最近の子つて怖い!」

「俺が最近の子だったらあんたも最近の子だろうが!」

幽識はいまだにクスクス笑っている。

「所で人識はどこ行く予定なんだ？」

「なんだよいきなり。京都に八つ橋食いに行くんだよ。それがどうした？」

「じゃあ俺も京都に行こう」

すると人識はため息をついて相変わらずニヤニヤ笑っている幽識を冷めた目を見た。

「……あんた目的地もなく電車に乗ったのかよ。傑作だぜ……。」

「いやいや、ある人の手伝いに行くんだけどやっぱ人識に着いてって京都観光楽しもうかと。」

「待て待て！じゃあその手伝いすっぱかして着いてくるつもりだったのか！？」

「いえーすあいどう。」

すると人識はどっと疲れたという様な顔を浮かべて呆れていた。

「あのなあ幽識さん？人との約束は守ってやれよ。」

「ははは。わかってるよ冗談だって。」

「……まあいいか。……その手伝い危ねえのか？俺も手伝ってやろうか？」

幽識はそこではじめてニヤニヤした顔を驚愕の表情に変えて人識を見た。

「いやー人識が俺の心配してくれるなんて…やっぱり人識ってツンデレ?」

「はあ!？」

「いやいや冗談。しかし人識が俺の心配してくれるなんて嬉しいよ。」

「別に心配なんかしてねえよ。ただ楽しそうだからよ」

「……やっぱりツンデレ」

「なんかいったか!」

幽識はそこでいつものにやにや笑いに戻った。

「いいやなにも?……あつ人識京都着いたぞ。」

「おつ、やつとか。んじゃな幽識。大将に会ったらよろしく言っていてくれ。」

「おお会ったらな。」

「…さて、依頼内容聞いとくか。」

幽識は携帯電話を取出しある人物に電話をかけた。

『うにー』

電話の相手は《暴君》であった

「どうも幽識です。」

『あつゆーちゃんか。どったの?』

「依頼内容そろそろ教えて下さい。」

『あっそうかまだ言って無かったっけ』

「言っていないですよ」

『まあいつか。本当はぐっちゃんに頼もうとしてたしね。』

「もう面倒なんではやく言って下さいよ。」

『わかったよ。…学園都市に行つてあるデータとつてきて欲しいの。』

「あるデータ?」

……《暴君》ならばそんな学園都市如きで作られる物など、自分で作れるはずだろうになんて欲しがる?

『超能力者に関するデータなんだよ。』

「そんなデータとってきて何に使うんですか。まさか《暴君》超能力者にもなりたいんですか？」

『うにー違う違う。ただちょっと見てみたいなと思って。』

ああやっぱりそういう事がまあ《暴君》はそういう人だからな。

「そうっすか。じゃあ電話切りますね。」

『ああちよつと待っていてーちゃんとかわるから。』

「えっ！…はい。」

…いたんだ戯言。まあアイツは《暴君》の彼氏だしねいても不思議ではないか。

『久しぶりだね幽識君』

「久しぶりだな戯言」

いやー今思うとこいつ人識に似てんだよな。なんでだ？

『いやあごめんね友の我が儘聞いてもらって。』

うんやっぱいい人だな戯言は、泣けてくるよ。

「……………」

『あのー幽識君?』

「へっ! ああごめんごめん。いいよ俺も学園都市見てみたいから」

『そうなんだ。まあ頑張つてね僕が出来るのは応援だけだから。』

「ああそれだけでも励みになる…ありがとう」

『よかった。それじゃあね。』

「ん、じゃあな」

幽識はそこで電話を切った

「さてじゃあそろそろ仕事しますか。」

相変わらずニヤニヤして学園都市に入っていた。

## オリ主プロフィール

ここらでオリ主の紹介を。

零崎幽識

《捕食願望》『プレデターデザイナー』

20歳

13歳の時零崎に覚醒、以後軋識の元で2年間特訓を積む。それから後に戯言遣いに会う。そこから軋識とは別行動をとる様になる。その後依頼を受けたり（主にパシリ）して生活費を稼いでいた。冥土帰しとは知り合い。昔の記憶をあまり覚えていない。

容姿

身長171?

体重47?

中肉中背

髪は少し長めで色は赤黒い体型はすらりとしている。服はいつもパーカーとジーパン。目の色は黄色。

## 出違い

「いやはや、これが学園都市……聞いてたよりスゲエな。」

ここは学園都市。脳を《開発》し超能力者を研究する場所である。全人口約230万人でその八割は生徒である。

「しかし、こんな所俺には一生縁がないと思ったんだが…今回は《暴君》に感謝感激雨あられたな。」

そんな軽口を叩きながら殺人鬼――零崎幽識は歩いていた。

「…あのー私帰りたいんですけど」

「いーじゃん俺らと遊ぼーぜ」

あらー学園都市にも群れないとナンパ（脅し）出来ない奴らがいるんだねえ。つてか超能力があるんだから女の方も使えばいいのにかもまわりの通行人も見てみぬ振りか。

「まあ超能力者食ってみたいし…騒ぎ起こさない様にして殺るか。」  
幽識は口角を吊り上げ少女を脅している不良に近づいて行った。

「いや本当帰して下さい。見たいドラマあるんですよ。」

「いいから来いよ。」

「待て待てその女の子離してやれよ嫌がつてんじゃん。」

「ああ？なんだおまえ。」

「通りすがりの一般市民です。いやーしかし群れるねえあんたら能力使えるくせに。」

すると不良達はいきなりキレました。

「うるせえ！俺達や無能力者（レベル0）なんだよ！」

「はあ？」

幽識は学園都市の生徒は全員能力者だと思っていた。

「それじゃああんたら能力使えねえの？」

幽識の空気の読めてない言葉にさらに不良達はキレた。

「おい、こいつ砂にしてやれ。」

不良達は一斉に幽識に殴りかかって来た。

しかしあくまでも一般人の不良達が殺し名序列第三位の零崎幽識にかなうはずもなく全員あっけなく腕を折られた。

「ギヤアアアア！」

幽識は不良達から目を離し脅されていた少女に目を向けた。

「おい、その女の子名前なんての？」

「えっ！あつさ、佐天涙子さてんなみこです。」

幽識は佐天涙子に「じゃあ佐天ちゃんこいつらの後片付け頼むわ。」  
と言ってその場を後にした。

2分後……

「佐天さん！」

「あつ初春」

佐天に近づくとこの頭に花を付けている少女――初春飾利ういはるかきりは、この学園都市で風紀委員シャッジメントをしている。

「佐天さん！どこも怪我とかしてませんか？」

「いやいや怪我とかはないけど。向こうは……」

と言いながら佐天は、腕を押さえて呻いている不良達に目を向けた。

「もしかしてこれ佐天さんが？」

「いやいや私じゃないって。」

「じゃあ一体誰が？」

「それは……あつ！名前聞くの忘れてた……」

「いやー危ねえ危ねえもうちょっとで公衆の面前で殺っちゃう所だったぜ。出来るだけ殺すのは自重しないとな。」

幽識は公園のベンチに座りながら缶コーヒーを飲んでいた。

「さて、学園都市も一通り見て回った事だし明日から……家探します

か。」

今日も野宿か、などと考えていたら携帯に電話が入って来た。

「ん？誰からだ？」

―零崎軋識―

「あつ師匠からだ……っいつい。」

『幽識、お前なんで仕事を受けてるんだ。珍しいな。』

師匠――零崎軋識は幽識の前ではキャラを変えても一緒に行動していた為、意味がないと判断して、以降幽識の前ではキャラを変えなくなった。

「いいじゃねえかよ師匠。俺、学園都市来てみたかったし。」

『ほとんど観光気分じゃねえか…で、仕事の方はどうだ。順調か？』

「いや、まだ学園都市あらかた見回しただけ。」

『遅いな。やる気あるのか？』

「仕方ないでしょ。以外とここ入り組んだりしてるんだよ。」

『…まあいい。じゃあ俺は行かなくていいのか？』

「ああ束の間の休息を味わうといいよ。」

『じゃあそつとさせてもらう。頑張れよ幽識』

「ん、サンキュ師匠。」

「風紀委員シヤツジメンです！この場から早急に避難してくださいー！」

「あの…ウチの店で何か…？」

「この付近で重力グラビトン子の爆発的な加速が観測されました」

「ぐくじゅっ？」

「簡単に言うと爆弾が爆発する前兆があったという事です。この店に爆弾が仕掛けられたと思われます。」

「クソっ 一体どこに…！」

「きゃっ…イタタタ…！」

「どっした!?!」

「スイマセン足を…！」

「早く避難しないと…」

ブンッ

「何っ!?!これが爆弾!?!」

ドッゴオオオオオオン!!!

「くっ」

「大丈夫!?!怪我は?」

「わ…私は…この人が…庇ってくれた…から…で…でも…」

虚空爆破事件1 (前書き)

今回はほとんど原作です

## 虚空爆破事件 1

「ーとまあ以上が昨日の夕方に起こった事件ですの…聞いてます？お姉様」

「聞いてるわよ連続爆破事件とかいうやつでしょ」

「正確には連続虚空爆破事件ですの」

風紀委員の白井黒子はそう言いながらアルミ缶を指した

「アルミを基点にして、重力子の数ではなく速度を急激に増加させてそれを一気に周囲に撒き散らす。…様は《アルミを爆弾に変える》能力ですの。ぬいぐるみの中にスプーンを隠して破裂させたり、ゴミ箱のアルミ缶を爆破するといった手を使ってきましたの…爆発の前に前兆があるので死者こそ出ていませんが、まだ犯人の特定ができてませんの」

「能力者の犯行なんでしょ？だったら、学園都市の《書庫》（バンク）にある全ての学生の能力データをあたって該当する能力を検索すれば容疑者を割り出せるんじゃないの？」

学園都市に7人だけいる超能力者（レベル5）の第三位ー御坂美琴は疑問に思った。

「妙なのはそこですの。《量子変速》（シンクロトン）、それも爆弾に使用できる程強い力を持った能力者となると、学園都市には大能力者（レベル4）釧路帷子という生徒ただ一人…。」

「それじゃあそのクシロさんが容疑者じゃないの？」

「それが、一連の事件の始まりは1週間前なのですけれど……彼女は8日前から原因不明の昏睡状態に陥っていますの。」

「しばらくの間ここに住むか……。」

ここは学園都市内にある廃ビル。何故、幽識はこんな所に住もうかとしているのは学園都市に入る際、IDを使わずに潜入した為、物件を探す時IDを使わず潜入した事がばれるかも知れないので物件が探せなかったのだ。

「まあ日当たりはいいし掃除すれば住めるが……パソコン繋がるのか？」

幽識は廃ビルをくまなく見て最上階のある一室に決めた。

「ん〜住む所があるってやっぱいいね。なんか安らぐわ〜。……そーいえば腹減ったな、なんか買いに行こ。」

幽識はそう言うとコンビニに向かった。コンビニはこの廃ビルのすぐ近くにあった。

「いやーこんな近くにコンビニあるなんて。……あのビル以外と便利だね。」

「おい待てや」

幽識はいきなり不良に声をかけられた。

「何ですか？ナンパですか？俺にそんな趣味ないです」

「俺もねえよそんな趣味。…そんな事よりダチが世話になったみたいだなあ」

そう言うとぞろぞろと不良達が集まってきた。その中には腕が折れた奴らもいた。それを見て幽識は思い出した。

「ああ！あの時群れてた奴らの仲間か！」

「ははは。あん時は油断したが今回はこんだけ人数がいるんだ。覚悟しな。」

幽識は周りを見渡した。

(まあざつと13人が…今回は人目も…ないな。)

「んじゃあ零崎でも開始しますか。」

そついいながら幽識は二又に別れているチェインソー―《捕食願望》(プレデターデザイナー)を構えた。

「おまえらやつ…」

ドジュツ

まずリーダー格と思われるの男の首と体を分離した。そのまま返り血を浴びない様にして他の不良達の首も切った。



すると佐天は何故か不服そうになった。

「クラスメートなのに敬語とは他人行儀だねえ…どれ!!距離を縮めるために親睦を深めてみようかね!」  
「そう言いながら佐天は初春のスカートをめくった。

「わーーーー!!めくらないでくださいっ!!連続でめくらないで  
~~~~~っ」

「ごめんごめんちょっと調子に乗っちゃった」

「ヒドイですよ……」

「おわびにあたしのパンツ見せよっか?」

「結構です」

「あ、そーだ」

佐天はプレイヤーを出した

「初春が聞いたがつてた新曲ゲットしたからこれで機嫌直して」

「あっこれ今流行のプレイヤーですよねダウンロード中心の」

「まーね今も新曲引っ張ってきてんだけどPV付いて一曲百円よ。CD買ってた頃なら信じられない値段よねー」

「インディーズの人達も個人で気軽に登録配信できるようになったのはステキですね」

「うん、まあその分シヨボい曲も溢れ返ってんだけどね」

同時刻

ある少年が不良に絡まれていた。

「ひっ!」

「人にぶつかつといて謝罪もなしかよ？」

「え?だってそつちがぶつかつて…」

ゴッ!

「アッ!」

すると風紀委員が駆け寄ってきた。

「こらそこ!何してる!」

「おい風紀委員だぜ」

「っせーな何でもねーよ」

そついいながら不良達は去って行った。

「全く……君大丈夫か？」

「……もっと早く来いよ」

「？なにが言っただかい？」

「別に……」

少年はそのまま立ちさって行った。

## 虚空爆破事件 2

「学園都市に来てもう1週間か……学園都市のデータベースには俺はアクセス出来ねえしどーしたもんかね。」

零崎幽識はこの学園都市に来て1週間、《暴君》からの依頼の進み具合はあまり芳しく無かった。パソコンを使えなければどこかの研究所に浸入すれば資料ぐらいあると思うが騒ぎを起せば警備員やアンチスキルジャッジメント風紀委員が黙ってないので完璧なまでに手詰まりとなっている。

「しかし俺はパソコンそんなに使えねえしあー困った困った。」

「待ちなさい！今日は決着つけてやる！」

「不幸だああああ！」

なんだありや？高校生が中学生に追いかけてやがる。しかもこつちに近づいてきてるし。

「ちゃんと私の相手をしろーっ！」

「何で俺だけビリビリに追いかけるんだ〜？！」

よし逃げよう

幽識はそう思いその場を後にしようとした。

「っらぁー！」

ビリリリッ……

「うわっ!」

「ふぎっ!?!」

ビリビリ中学生こと御坂美琴の電撃は追われていた高校生――上条当麻に避けられ近くにいた幽識には流れ電撃?が直撃した。

「あちゃー」

「あちゃーじゃねえ!何民間人に当ててやがる!」

「あんたが避けるから悪いんでしょ!」

「……」

何ですか今の?なんかこう高校生が中学生能力者の電撃を避けたのはいい。でも何で俺の所に飛んでくる?しかしこの電撃なかなか痺れがとれん。

「んじゃ上条さんは帰ります。じゃあなビリビリ!ちゃんとその人に謝っとけよ」

「ちよつと待ちなさい!!」

上条当麻は脱兎の如く逃げて行った。

「くそー…逃がしたか。所であんた大丈夫?」

「んまあ大丈夫ご心配なく」

「そうですか。…えっとそのゴメンナサイ！」

「いやいや本当に気にしないで」

そう言いながら幽識は立ち上がった。すると

「あっ！御坂さーん」

「ん？おー初春さんそっちはお友達？」

「はいっこれから一緒に洋服を見に…」

ガシッ

『ちよつとあのヒト常盤台ときわだいの制服着てんじゃない…知り合いなの？』  
「ええと風紀委員の方で間接的に…しかもあの方はただのお嬢様じゃないんですよ…あの学園都市最強の電撃使い（エレクトロマスタ  
ー）あの《超電磁砲》（レールガン）の御坂美琴さんなのです！！」

「ウソ…まさかあの《超電磁砲》？」

佐天は若干興奮したように御坂をみた。

「あのっ…あたし佐天涙子です！初春の親友やってます！！」

「そ…そうよろしくね」

「あのー御坂さん？後ろで座りこんでるあの人は…？」

「ああ実はね？…」

「あああああ！」

「どうしたんですか佐天さん！」

「この前助けてくれた人だ！」

すると幽識はいつの間にか買っていた美味しい豆乳から目を離した。

「ん？誰かと思えばあの時群れられてた…名前はたしか…佐々木佐天です」ああ佐天ちゃんか。」

「あの時はありがとうございました」

すると初春が佐天に話しかけた

「佐天さん、あの人があの時、不良から助けてくれた人ですか？」

「うん。」

「所で御坂ちゃん？だったけ？」

幽識は突然御坂に話しかけた。

「え？ああはい」

「ここら辺にデパートみたいな所ない？」

「それならセブンスミストが近いと思います。」

「そっかあんと」

そういいながら幽識は立ち上がった。

「あのっ」

「どーしたの？えーと佐々…佐天ちゃん？」

「名前教えてもらえないですか？」

「ああ俺の名前？零崎幽識っつー名前だよ…それじゃあな。また縁があれば」

そう言うと幽識はその場から去って行った。

「いやーこのセブンスミスっつーデパートかなりでかいな。」

幽識は目的の物を買った後、そこら辺を特に目的もなくうろつろし  
ていた。

「あっあなたは」

「ん？」

幽識が振り返るとそこには上条当麻がいた。

「あなたは確か上条っつたっけ？」

「ああ、あなたは何してんだこんな所で？」

「いやーちょっと糸買いにな？」

すると幽識は上条の後ろに小さな女の子がいる事に気が付いた。

「お前……ロリコンだったのか!」

「違う違う!この子が洋服店探してるって言うから案内してやっただけだ!決してロリコンではない!」

すると幽識はニヤニヤして上条を見た。

「そんなに否定されたら逆に怪しいなあ?」

「だーかーらー!」

「はははははは」

しばらく幽識は上条をおちよくって遊んでいた。すると

「あっビリビリだ」

上条が見た先にはあまりにも子供趣味のパジャマを見ている御坂がいた。

「なあ上条くんあれ中学生にもなって着るもんじゃないよね?」

「ああ、まあな」

「行って来い!」

そう言うやいなや上条を御坂に向かって突飛ばした。

「おわあっ!」

しかし御坂はパジャマに魅入っていて上条に気が付いていない。

そして御坂がパジャマを鏡に向けた時そこで御坂は上条に気付いた。

「……っ!! なっ、なんであんたがこんな所にいんのよ!」

「いちゃ悪いのかよ」

「あはは君ら仲いいね」

「「どこが!」」

すると幽識は可笑しそうに笑った。

「いやー超能力者もあんだけ取り乱す事があるんだねえ」

「別に私でも取り乱す事はあるの。」

「しかしビリビリのあのパジャマはいくらなんでもないと思うぞ?」

「あ、あんなの買うわけないでしょ! あんな子供っぽいパジャマ」

「あれれ? 上条さんは買うのかなんて一言も言っていないよ?」

「!」

「素直になればいいのに」

そついいながら幽識と上条はクスクス笑った。すると

「おにーちゃん」

向こうから女の子が走って来た。

「このおようぶく……あ、トキワダイのおねーちゃんだ」

「昨日のカバンの子……お兄ちゃんってアンタ妹いたの？」

「さっき聞いたんだけど違うんだってさ。この子供、上条の恋人なんだってさ」

「違うわー!!」

「あはは、ジョーダン洋服店探してから案内してたんだっただよ  
ね？」

「……アンタがいると倍疲れる」

「んじゃ俺はお邪魔なので後は若い人同士で今日みたいにいちゃつ  
いときな？」

「「いちゃついでなんかないわ!!」」

幽識はそんな感じの2人をみてニヤニヤ笑みを浮かべてその場から  
離れた。

(いやー上条と御坂ちゃんおちよくって遊ぶの楽しいね)

幽識はそう思いながらゲームセンターをうろろろしていた。

すると明らかに何か企んでそうなメガネ君がUFOキャッチャーを  
していた。

幽識はなにか変な感じがしたのでそのメガネ君を監視する事にした。

(うわーなんかブツブツ言ってる絶対なんかしでかすな)

そう思いながらも幽識は監視を続けていた。

するとメガネ君はさつき上条に案内してもらった女の子にUFOキヤッチャーで取った変極まりないカエルを渡した。

幽識は即座にメガネ君に近づいた

「やあそのメガネ君あのぬいぐるみの中にはなにを入れたのかな？」

幽識はこれをかまをかけたつもりだったのだが

「!?!」

どうやら何か入れた様だった。幽識はこれを見逃すはずもなく、

「…入れたんだね」

「いやだ誰か知りませんがそんな事なんでボクがしないと駄目なんですか？」

「そりゃあんたが爆弾魔だから？」

これもかまをかけたつもりだったのだがどうやらビンゴだったらしい。メガネ君はこちらに向かってスプーンを投げて来た。幽識はそれを手で受け止めたのだがいきなりそれは爆発した。

「つく！」

爆発は爆竹程度だったのだが幽識はいきなりの爆発に少し怯んでしまった。その隙にメガネ君は人混みの中に紛れた。

「…あんのクソガキ！」

幽識は衝動で後を追おうとしたがなんとか衝動を抑えて上条らを探す事にした。

幽識はあれから店内を走り回ってようやく上条を見つけた。

「上条！」

「おおなんだ？アンタそんなに急いで」

「あのお前が連れてた女の子どこ行った？」

「いや知らねーが？どうした」

「今すぐ探してぬいぐるみ取って来い」

すると上条は怪訝そうな顔になった。

「なんで「そのぬいぐるみは爆弾になってんだよ俺は主犯を捕まえて来るからお前は御坂ちゃんにくつついてた風紀委員名前は…忘れたとにかく知らせてやれ」え？あっちよと待て…」

そう言うと幽識はかなりの速さで外へと駆け出した。

「…たたくどこ行ったあのメガネのクソガキ」

幽識は外に出たがメガネ君は見当たらなかった。  
しかも店から離れて来た奴らもいて探しにくくなっていた。

「……………！」

幽識はメガネ君が路地裏の様などころに入ったのを見つけて後を追いかけた。

その瞬間

ドオオオオン！

デパートが爆発した。しかし幽識は爆発したデパートに振り向きもせず路地裏に入った。

「そこまでだぜ？爆弾魔さん」

メガネ君は幽識にいきなりスプーンを投げようとしたが……

「なんで手が動かない！？」

メガネ君はスプーンを投げようとするが手が動かない

「久しぶりだったができたか」

幽識の手にはさつき買ったタコ糸を持っていてそれがメガネ君の腕や身体に巻き付いていた。

「なんなんだよこの能力！！」

「いやいや能力とかじゃなくて曲弦系つってな？相手を拘束するために使ったりする技なんだよ。」

「くそつ外せよ！」

「無理だよ……殺人鬼が獲物を逃がす訳ないだろ？」

するとメガネ君は困惑した表情になった。

「は？アンタなに言ってる……」

すると幽識はケタケタ笑いだした。可笑しそうに笑った。

「言葉通りの意味だよ……俺は殺人鬼だよ、アハハハハ！」

「殺、人鬼？」

「そーだよ……まあ今回は誰かに見られるかもしれないから殺れねえけどね。」

そう言うとメガネ君を放置して幽識はその場から去って行った。

「しかしあの爆弾魔の男は誰に拘束されてたんだろ。」

「さあ？いくら問い詰めてみても『殺人鬼にやられた！』としか言わなかったみたいですの。」

「殺人鬼ねえ……。」

あれからあの爆弾魔は警備員に取り調べのため連行されて行った。

「まあ殺人鬼にやられたと言うのは容疑者のなにかの間違いでしょう。」

「おや御坂ちゃん」

御坂がその声がした方を見ると幽識がいた。

「あつ幽識さん」

「お姉様この殿方はいったい誰ですの？」

「あああんた幽識さんに会った事なかったっけ？」

すると初めて幽識は御坂の隣にいた白井黒子に目を向けた。

「なんだいその子。御坂ちゃんの妹さん？」

「違いますのわたくしの名前は白井黒子、お姉様の伴侶で…」

黒子は御坂からの電撃でやられてしまった。

幽識は黒子から目を離した。

「それにしても最近良く会っね」

「そうですね」

幽識は黒子に殺気のコもった目で見られていたが無視していた。

「んじゃあ俺は用事があるんで失礼するよ。デート楽しんでね？」

「なっ！デートじゃないわよ！」

幽識は御坂と別れた後ある研究所に向かっていった。

## 虚空爆破事件2（後書き）

今回は会話などが多くなりました。誤りやアドバイスなどどんどん送って下さい。

## 人喰い襲来（前書き）

タイトル通りあの人が出ます。

## 人喰い襲来

「やっと着いた…」

幽識は御坂達と別れた後ある研究所ー樋口製薬・第七薬学研究センターに向かった。しかしかなり距離があつた為着いた頃には辺りはすでに暗くなつていた。

「しかし…あのメガネあそこで殺つとくべきだつたな俺もあんな所で調子にのつて殺人鬼なんて言うんじゃ無かつた。ばれたらどーしよ……まあいつか、ばらしたつっても俺が零崎つたつて分かる様な証拠を残すへまはしないしな。」

幽識はそう言うつ樋口製薬・第七薬学研究センターの中へと侵入した。

「しかしここに能力者についてのデータがあるのかねえ？」

「なんだこりゃ？ここの警備薄すぎるつーの」

幽識の侵入方法は実に単純だつた。まず入り口にいた警備員を曲弦糸で首を締めて切り落とし、監視カメラや警備ロボの電源を落とし、

その後巡回していた警備員を《補食願望》（プレデターデザイン）で殺して回つた。

「メインルームは何処ですかなつと……おっここかな？」

幽識はふとあたりを見回した。

「なんだあれ……培養器か中に人が入ってるな。」

幽識は培養器から目を離すとコンピュータに向かった。

「これだな。えつとここをこうしてあーすれば……よし！内容は…  
《超電磁砲量産計画『妹達』》？」

幽識はなんとなく興味が湧いたので読んで見ることにした。

『本計画は超能力者（レベル5）を生み出す遺伝子配列パターンを  
解明し偶発的に生まれる超能力者（レベル5）を100%確実に発  
生させる事をその目的とする本計画の素体は《超電磁砲》（レール  
ガン）御坂美琴である』

「へえあいつそこまで凄い奴だったんだ。クローン作るほど超能力  
者って奴は珍しいのか。んで後は」

『《妹達》の作成には超電磁砲の毛髪から抽出した体細胞を用いた  
受精卵を使用、必要な……』

「あー訳わかんねパスパス」

そついいながら幽識はディスクにデータをインストールしだした。

「一応《暴君》に渡しておこう。まあ学園都市がどうなるのが俺に  
は知ったこっちゃないし。」

それとこれ、なに書いてんのか全然わかんねえし。

幽識はディスクにデータをインストールしている間、培養器を見て  
いた。

「クローンか…スター オーズかつつの」  
すると外が少し騒がしくなってきた。

「ちっ一人殺つとくの忘れたか…」

幽識はディスクを抜きだしてその場から立ち去った。

「さてこのまま帰るとしますか」

幽識は樋口製薬・第七薬学研究センターから離れて自宅？に向かっていた。

「ぎゃははやっと思つけたぜ零崎幽識」

幽識はいきなり声をかけられた。しかも零崎だと言つ事を知っている。

「あんた殺し名か？」するとその少女は笑いながら答えた。

「ああそーだよ。いやそーだったと言つべきか…」

「どっちなんだよ」

「まあどっちでもいいじゃねえか」

「いいのかよ」

そこで少女は首を傾げた。

「ん？あんた零崎幽識だよな。なんでそんなに口数が少なくなえん

だ？」

「眠いだよ。」

そのまま幽識は立ち去ろうとしたのだが…

「待てよ」

幽識はその少女に蹴られてもんどり打った。

「げふう！？」

全くの予想外の攻撃を眠かった事もありもろに食らってしまった。

「いつてえ！なにしゃがんだ！」

「おいおいこの匂宮出夢におうのみやいすむが逃がしてやると思うか？」

「匂宮：出夢：ああお前《人喰い》（マンイーター）か…はあ俺も厄介なもん目をつけられたもんだな！」

そついいながら幽識は出夢に飛び掛かった。

意外と幽識は短気だった。

「ぎやはは、そりやお気の毒になあ！」

その攻撃を出夢は身体を反らして避けた。

幽識はそのまま身体の向きを変えて出夢に向き合う形になった。

「てめえなにが目的だ《人喰い》さん？」

「いやな狐さんからの仕事でなあんたを調べてこいって言われたんだよ。」

「狐?…ああ西東天の事かんで調べてこいって俺の何をだ?」

「敵になれるかどうかだよ」

「敵?」

幽識は訳がわからないという感じで首を傾げた。

「まあ理由はどうでもいいか…てめえを殺せば寝れるんだから」

幽識は服の中から《補食願望》を取り出した。

「あんたいつもそんな所に入れてんのか」

「ん?まあな…じゃあサクッと零崎を開始しますか。」

## 人喰い襲来（後書き）

ここで幽識の武器について紹介を

《補食願望》（プレデターデザイン）

大きさは普通のチェーンソーぐらいで鋸の部分は二又に分かれています。

折り畳み可能

## 人喰いVS人食い(前書き)

一万アクセス突破！アクセスしてくれた皆様ありがとうございます  
これからも温かい目で見えてやって下さい。

## 人喰いVS人喰い

「ぎゃはは！なかなかやるじゃねえか」

戦闘開始から10分、両者とも相手に決定的なダメージを与えられていなかった。

（くそつ流石に腕を拘束していても殺し名序列一位なだけはあるか！）

「どおーした？もう疲れちまったのか？」

「んなわけねえよ！」

幽識はそこで《補食願望》（プレデターダイヤ）を構え直して出夢に向かつて行った。《補食願望》の腹の部分を出夢におもいきり叩きつけたのだが幽識もそのまま出夢の蹴りをもろに胴にくらった。

「ーーーーっ！！」

出夢は大したダメージを受けていない様だが幽識は蹴られた時、肋骨が折れ、殺し名序列一位を相手にするにはつらいダメージを負ってしまった。

「流石は《人喰い》と言うべきか…」

「んだよもうやる気がなくなったのか？」

すると幽識はこの殺し合いの最中で初めて笑った。

「ハハハ！やる気がなくなる？いやいやその逆だよ逆、やる気がかなり出てきた！」

そう言いながら幽識は《補食願望》のスイッチをつけた。

「俺は追い込まれば追い込まれるほど燃える奴でねえ！」

「ぎゃははお前はMかよ」

「否定はしねえよ！」

幽識はそういいながら出夢に飛び掛かった。しかし

「わりい時間だ」

「はあ？」

幽識はいきなり出夢の言葉に動きを止めた。

「いやわりいなせつかく盛り上がって来た所で、僕は殺戮は1日1時間って決めてんだ」

「いやいや！まだ1時間もたってねえだろ」

すると出夢は肩をすくめた

「仕方ねえだろここに来るまでに警備員の奴らがいてさーそいつら撒くのかでかなり時間かかったんだよ。あいつらはなんだ？いき

なり撃つてきやがった」

警備員アンチスキルにいきなり撃たれるってどんだけ強引に入って来たんだよ。

「まあ流石に正面から入って来たのはまずかったか」

それを聞いて幽識はよろけた。

「おまつ…学園都市に正面から入ってくるってなあ」

「ぎゃはは凄くね？」

確かに凄いが！

「そう言えばアンタはどーやってここに来たんだよ？」

「ああそれは…学園都市に知り合いがいて浸入出来るルート教えて貰った…そーいえばあいつに貸し作っちゃったなあ」  
そんな事を呟いた

「ああ…あいつに貸し作ると後々面倒くさいんだよなあ…ってああ  
！…人喰いの野郎どこ行きやがった」

出夢は幽識が独り言を呟いているうちにどこかに行ってしまった。

「……殺し損ねちまったなあ…師匠に怒られちまうよ」

幽識は億劫そうに呟きながら廃ビルへと戻って行った。

「しかし西東天か…何とかしねえといろいろと厄介だな」

？視点

なんで私血まみれになってるの？しかも周りには武装無能力集団スキルアウトが横たわっていて血の海に沈んでいる。私の手には血に濡れたナイフがある。確実に私がこいつらを殺したのだろう。記憶が途切れ途切れだがこの状況を見れば百人中百人が私きはらあかねー木原茜が殺したと思われるだろう。

「なんで殺しちゃったのかなあ…」

まだまだ高校生なのになあ前科持ちかあ

「まあいいかどーせ生きるのに疲れたし捕まっても誰も心配しないし」

どうせ実験体が一人いなくなるだけだしねどうせ私の代替品はまだまだいるんだしもうどうにでもなれ…

「へえそのナイフだけでこれだけの人数殺したのか…なかなかやるねえ君」

いきなり茜は声を掛けられたので振り向いたそこにはパーカーを来てジーパン姿の髪が少し紅い男アンチスキルー零崎幽識がいた。

「あなたは誰ですか？警備員アンチスキルに通報でもするんですか」

すると幽識はけらけら笑って茜を見据えた。

「お前を通報なんかしねえよ」

「んじゃあなんですか？揺するつもりですか」

「いやいやそんなんじゃなくて…俺の家賊にならない？」

次の瞬間私はその人を刺しにかかって行ったしかしいとも簡単に組み伏せられた。

「放してください！私は自首しに行くんです！」

「待て待て！いっぺん落ち着け」

「うるさい！変態！」

「変っ…！」

明らかにこの人の顔が焦った感じになった。

「変態つて…変態つて…」

「どけえ変態！」

私はその人を押し退けその場からはなようとしたけど何か気になったので振り向いた。

「俺は変態じゃない…俺は変態じゃない…」

可哀想なくらいへこんでいた。

流石にへこみすぎなので声をかける事にした。まあ少しは気になっ

たし。

「あの〜…」

「なんだよ俺は変態じゃないぞ変態は双識の兄貴だ」

「いえその事は謝ります本当にスイマセン」

「……まあいいか」

すると幽識は立ち上がった

「俺の名前は零崎幽識だ。よろしく…妹」

「あ、よろしくお願いしますってえ妹!？」

「うん」

幽識は至極当たり前と言うように頷いた

「いやいや妹つてえっと…幽識さんは何を仰ってるんでしょうか？  
私人殺しなんですよ?」

「ちよつと待て今間違ってたぜ?お前は人殺しじゃない…殺人鬼  
だ」

「殺人、鬼?」

「そつ俺も殺人鬼…いやいろいろあつて俺は食人鬼とも呼ばれてる  
けどな」

幽識は「キャハハ」と笑いながら言った

「殺人したのって今日が初めて？」

「当たり前です！」

「そうか初めてか…と言う事はえっと茜だったっけ？…茜は今日零崎に覚醒しましたおめでとう」

パチパチ

幽識は手をたたいて笑みを浮かべていた。

「えっ？零崎って何？」

「…零崎っつーのは殺し名に名を連ねていて構成人数が大体二十数人で全員が四字熟語の2つ名を持っていて血の繋がりがりじゃなく流血によって繋がる家族だよ」

「家族…」

その言葉は置き去り（チャイルドエラー）の茜にとって憧れの言葉だった。

「まあ変態兄貴もいるし常識あるくせにロリコンの兄貴もいるが…世界で一番の家賊だぜ？」

茜はこの時、すでにその家賊に加わりたいと思っていた。

「私もその家賊に加わりたい…もう一人は嫌」

「よっしゃ！んじゃ名前考えねえとな！えつと茜だから…せうさきあかり零崎紅織  
だな。」

「零崎紅織…わかったよ幽識兄ちゃん」

「ん、よろしく紅織まあ他の家族はいつか紹介するから、んじゃ、  
ま」

帰るかと言って幽識と紅織は自宅へと帰って行った。

## 人喰いVS人食い(後書き)

相変わらずの駄文ですみません！今回は新しい零崎が生まれたので次回から活躍させたいと思います。勿論今回出なかつた超電磁砲キヤラとも会わせたいと思います。

## 零崎の長男

私は昨日人殺しを初めてしました

しかし不思議と罪の意識はなかった。それよりも何だかスッキリした感じになった

人殺ししといてスッキリしたって可笑しいかも知れないが初めて深呼吸したくらいスッキリした。

幽識兄ちゃんが言うには私は殺人鬼になったらしい。しかし私は後悔はしていない。むしろ私は新しい家賊を手に入れたので嬉しかった。新たな私——零崎紅織の始まりはどうなるのかな？

「？あかおり紅織日記なんて書いてんのか？」

「まあねこれが私の趣味みたいなもんだし」

紅織は日記を書きながら横で寝ている幽識うしちきに返事をした

「へー……」

幽識はそういいながら紅織の日記を覗こうとした。しかし紅織におもいつきり頭を叩かれた

「いたっ！」

「勝手に覗かないで叩いちゃうよ？」

「叩いてからゆーな!…っつ」

「ほらあ幽識兄ちゃん怪我してんだから大人しくしてな?」

すると幽識は「りょーかい」とだけ言っつて素直に横になった。

「そついえばお前まだ溜まってないのか?」

「性欲?」

「違つわ!…殺人衝動だよつてかそれしかねえだろ」

「わからないよ?私が兄ちゃんにムラム…」

「兄貴にセクハラはやめんかい」

幽識は紅織が喋り終わる前にデコピンをして黙らせた

「痛つ!妹になにすんの!?!」

「うるせえ」

幽識は今この妹は一賊の長男の零崎双識（せろし）に預けてしまおうかと思つた。しかし紅織が双識並みの変態になつて帰つて来そうなのでこの考えはすぐに放棄した

「で殺人衝動、だっけ?そんなに無いけど?」

「……………そつか」

幽識は少し嬉しそうな表情を浮かべて紅織の頭を撫でた

「なにすんの？」

「いやあ何となくな？」

「…まあいいか私学校行つて来るね！」

「おおクラスメイト皆殺しすんなよ」

「流石にするかあ！」

そついいながら紅織は学校に向かって行つた。  
部屋に残された幽識は不意にカレンダーを見た。

「あれ？今日つて日曜日？」

「あつ茜」

「ん？ああ涙子！」

紅織は学校に向かつている途中で佐天涙子と遭遇した。

「茜、相変わらずだねえうりうり」

「2日前に会つたばかりじゃん」

紅織と佐天はかなり前からの知り合いであり紅織が今のところ唯一

安心して近付けるのは佐天と今ここにはいないが初春だけである

「そーいえば茜なんで制服来てる訳？今日学校ないよ？」

「え？」

すると佐天はため息をついて「またあ？」と言った

「茜ってさぁ頭いいのになんか抜けてるよね」

「しつ仕方がないじゃん…それが私の可愛い所なんだから！」

「自分で可愛いって言うな自分で」

「えへっ」

「星つけた！」

そんな感じで二人でじゃれていると向こうから初春と美琴が歩いて来た。

「「初春」」

「あ！佐天さんと木原さん！」

向こうもこちらに気が付いて駆け寄って来た

「いやぁ初春相変わらず頭から花生えてるねえ」

「木原さんいきなりそれですか…」

「アハハハ… んでなんで初春の隣に御坂美琴が居るわけ？」

「へえ私の事知ってるんだ」

「当たり前ですよ。だって超電磁砲レールガンこと御坂美琴って言ったら有名ですよ。かなり幼稚な趣味があつてなんでもゲコ太が好きだとか」

「!!!」

「御坂さんどうかしたんですか？」

「えっ？ ああうんなんでも無い」

「フッフ」

御坂ちゃんキョドってるねえ

「御坂さんとは風紀委員ジャッジメントの方で…」

「ああ！ 確かに常盤台の制服着た人いたねえ確か… 白子さん？」「黒子さんですよ」「そおそ黒子さん」

「へえ木原さんって黒子の事知ってるんだ」

すると紅織は笑みを浮かべて御坂を見た

「はい！ 昔風紀委員の仕事を手伝った事があつたんですよ」

「へえ」

「ところで茜、今日どっか遊びに行かない？」

「いいよ！んでどこ行く？」

「んじゃお茶でもしに喫茶店行く？」

「行く！」

紅織と御坂達はそういうと喫茶店に向かって行った。

「まあそついう事で新しい妹が出来たぜ双識兄貴」

『いやあまさかこんな短期間で二人も妹が出来るなんてね』

「ん？兄貴も妹見つけたのか」

「あああの弟を探しに京都に行ったら偶然見つけた訳だよ…まあ早さわ蕨らびつて言う匂宮の分家といざこざがあったけどね」

「匂宮か…」

幽識は昨日いきなり殺しにかかって来た《人喰い（マンイーター）

》——匂宮出夢の事を思い出していた。

『それと幽識君は学園都市に居るんだって？』

「まあな」

『いまからそつちに行くから』

すると幽識は飲んでいたヤシの実サイダーを口から盛大に吐き出した

「ああ！？なんでまたいやその前に学園都市に入れんのか？」

『いやいやちよつと落ち着きなさい学園都市は氏神うじがみさんに頼めば簡単に入れるから。』

「あんたは氏神さんに頼り過ぎだ！」

『あははは』

「あはははじゃねえ！」

『いやしかしねえ』

コンコン

「双識兄貴ちよつと待て紅織が帰ってきたかも」

そついいながら幽識は扉を開けると…

「もう来てしまってるんだよ」

そこには随分と日本人離れをしてまるで針金細工の様なオールバックの男——零崎双識がいた

零崎の長男（後書き）

相変わらず文章下手ですいません！双識さん口調こんな感じではな  
かったらすいません。感想待ってます

## 新たな影（前書き）

なんか双識さんの変態とここまでじゃなかった気がする…

## 新たな影

「んでなんで俺が双識兄貴の紅織探しに付き合わねえといけねえんだ。」

「フフフ久しぶりに弟に会ったんだ。たまには2人で行動するのもいいと思ってね」

「…だったら飯くらい奢れよ」

そんな事を喋りながら零崎双識と幽識は歩いていた

「そーいえば兄貴《マインドトレンデール自殺志願》どうしたんだ？」

「あああれはね、あげてしまったよ」

「……いまなんて？」

「いやだから舞織ちゃんにあげちゃった」

「…はああああ！？あんた何してんだ馬鹿じゃねえのか！」

「こら幽識君人に馬鹿なんて言うんじゃない」

「うるせえ！馬鹿！変態！スットコドツコイ！」

さて今日は風紀委員が休みですしお姉様とお出掛けしようとしてましたのに肝心のお姉様がどこに行っただんでしょうか？ん？…あの殿

方は

「うるせえ！馬鹿！変態！スットコドッコイ！」

…なんかかなりの暴言はいてますわね

まあ風紀委員は休みですがここは止めておきますか。

「幽識さん路上で暴言を吐くのはおやめくださいはしたないですわ  
よ」

「？あなたは…ああ白井黒子がどうした今日は」

「今日は風紀委員が休みなのでお姉様とどこかに出掛けようかと…」  
ペタッ

「?!?!?」

シュツ、ドスツ

「うわっ！」

「…何してんだ？兄貴」

「このっ…殿方がっ…わた、わたくしのあ、足に…」

「あんたはいきなり何してんだあ！」

「いやー彼女の足に虫がついていたからね」

「兄貴いい加減にしろよマジで殺すぞ」

「幽識君、顔怖い」

幽識は双識から目を離すと黒子をみた

「すまねえなうちの変態が」だから私は彼女の足に虫が「黙れ」

「そ…その方幽識さんの知り合いなんですか？それとあなたそういうキャラでしたの？」

「んーまあ、なうちの長男だよ。んで俺のキャラはこっちが素だよ」

幽識はケタケタ笑ってそう答えた

「んじゃ俺らは行くから」

「えっあちよっと待つんですの！」

しかし黒子が呼び掛けた時にはもう二人は駆け出していた。

「あー…疲れたあー」

「そうだね流石にあの子を撒くの大変だったね」

幽識と双識はファミレスでくつろいでいた

二人はあの

あと黒子の追跡を振り切って走っていたのだが服が全くと言っていいぐらい乱れていなかった

「元はといえばあんたがいきなりセクハラするから」

「フフフいいじゃないか私も空間移動能力者に追われたのは初めてテレポーター」

だよ後あれはセクハラじゃなくコミュニケーションだよ」

「あれはコミュニケーションじゃなくセクハラだ」

幽識はため息をつくと大きく伸びをした

「あー今日は仕事休むかマジでやる気しねえ」

「相変わらずパシリしてるのかい」

「パシリゆーな悲しくなってくる」

幽識はそういいながらパフェを食べていた。人識ほどではないが幽識もかなりの甘党である

「しかしとっとと仕事も終わらせないと…」

「いましたわっ!」

「はい?」

そこには黒子がアニメだと後ろに鬼か般若が出てきていてもおかしくないくらいの表情をして立っていた

「あなた方覚悟の方はよろしいのです?」

「待て待て!俺は関係ないでしょ」

幽識は自分まで巻き込まれている事に抗議したのだが…

「貴方はこの前お姉様によく会うといっていましたよね？」

「いやー…それがどうした？」

「どうしたじゃないのですのっ！…貴方のような新参者にお姉様が取られるなんて許せませんわ！」

「いやいやただよく会うだけで別に取ってねえよ！？」

「ってか八つ当たりだろそれ

「問答無用！」

そういうと黒子は鉄の針の様な物を飛ばして来た

「あぶねえ！」

幽識は鉄の針を避けると双識を担いでその場から飛ぶ様にして逃げ出した

「店員さんお会計はあの子にでも請求しといて！」

「えっあ、はあ」

幽識はそういうと全力でそこから遠ざかっていった

「きいー待つんですのー！」

「ああ疲れたあ」

「あのそろそろ下ろしてくれない？」

「ごめんごめん」

そついうと幽識は双識を下ろした

「それにしてもあの子なかなかしつこかったね」

「多分今日はもう来ないと思うけどな」

さつき「お姉様」っていいながらどっか行ったし

「さて兄貴これからどうする？」

「そつだね…今から帰ってカレーを作…」

「今日は俺が作る！」

「さてここが学園都市か…噂には聞いていたがここまで科学が発展しているとは」

「あの…時宮さん？」

「ふっ…大丈夫だ目的を忘れた訳ではない」

「いや…その…そういう訳では…」

「ではなんだ」

「本当に…やるん…ですか？」

「ああそつだ早蕨さわわじびが殺し損ねた自殺志願マインドレンデルおよび捕食願望プレデターディサイアの抹殺そして…超能力者達（レベル5）の捕獲だ」

「しかし…超能力者達は…1人で軍隊と…対峙できるぐらいらしいんですよ」

「分かっている多少の被害は覚悟している…それに裏世界の我らがそんな子供に遅れを取るとでも？」

「…いえ」

「ならば行くぞ…安心しろ今ここには我等しかいないが後で加勢がくる」

「…御意」

そういうと2人は学園都市へと消えて行った。

## 刺客

「お姉様」

「黒子!？」

その頃黒子は幽識と双識を追っていたのだが視界の隅に美琴を見つけた瞬間、そちらに向かっていた

「あら？茜さんではありませんの」

「黒子さん…相変わらず百合ってますね」

紅織はそんな黒子を見てどん引きしていた。

「黒子なんであんたがここにいるのよ!」

「勿論お姉さ…じゃなくて!変態を追いかけてたんですわ!」

「」「」「……」「」「」

この時4人は心の中で「あんたが言うな」みたいなことを思っていた

「でもなんで黒子さんなんかに」

「茜さん?それはわたくしに喧嘩を売っていると捕えてよろしいんでしょうか?」

「嘘ですすいません」

紅織は黒子が針を構えたのを見てすぐに謝った

やっぱり殺人鬼になっても針は怖い

「しかしその変態黒子から逃げ切るなんてやるわね」

「ええ…しかもその変態何でも幽識さんの兄らしいですよ」

「えっ…」

幽識兄ちゃんの兄ちゃんだったら…

「双識っていう人かな？」

という事は家に帰ったら会うのか…どんな人だろ？

「さーてまいた事だし帰りますか」

「うふふそうだね、しかし紅織ちゃんだけ？早く会いたいんだけどね幽識君どこに行けば会えるか知らないかい？」

「知らねえよ、ってかまずアンタは会いに行くな」

「ええ！？どうして」

「当たり前だ！アンタは俺が見て無かったらなにをしますか分からん！」

「大丈夫、安心なさい私は近親相姦はしないから」

「そういう問題じゃねえ」

そういういながら幽識はため息をついた

この変態――零崎双識は見た目だけ見ればかなりイケメンなのだが昔、女子中学生のメールアドレスを貰ったとはしゃぎたおしてメールも限界まで入力して1日に百通も送っていた

…いやそれだけならいいのだがその事を自慢するためだけに呼びだしたりするのだ

それをこの女子中学生がうろろしている学園都市に野放しにしておしまつと見ててもあんな事をしでかしたのだから本当に何かしかねない

「とにもかくにもアンタは……！」

幽識は何か殺気を感じた

「どうやら敵が出て来たみたいだね」

「よくわかりましたねマインドレンデルさん、プレデターデザイナーアさん」

「くひゃひゃ、馬鹿だな灯芽、俺らこんだけ殺気出死てんのにばれねえってほづがおか死いつつーの」

そういいながら灯芽と呼ばれた緑の髪をした少女と茶髪の青年は飛び出して来た

「それでは自己紹介でも、私は匂宮灯芽」

「そ死て俺が死吹屍杭しきくしよる死くな！くひゃひゃ」

「ふむ呪い名と殺し名か…しかし死吹と匂宮がなぜ一緒に行動して

いるんだい？」

すると灯芽は双識の質問に淡々と答えた

「私達はある人物から貴方達を殺す様に言われてこの死吹と共に雇われただけで本当は一人でやりたかつたんですが…」

「灯芽くんなつれねえーこと言うんじゃねえよ寂死いじゃん」

「とにかく俺らを殺しに来たって訳だな？」

そういうと幽識は《捕食願望》プレデターディザイアを取り出した

「くひゃひゃ、いいぜ俺もはやく殺死合いやりたかつたんだよ」

「そーかそーか、んじゃま軽く零崎でも開始しますか」

そういうやいなや幽識は《捕食願望》を振りかぶって屍杭に向かつて行った

零崎幽識対死吹屍杭

― 戦闘開始

「それでは私達も始めましょうか」

「その前に一つ気になるんだけど灯芽ちゃん先に聞かせてくれ、きみはスパッツはどう思う？」

すると灯芽は少し疑問を感じながら答えた

「あれは蒸れるので好きではないです…それがなにか？」

「うふふ、ただ聞いてみただけだよ！さあかかって来なさい！私としては蹴り技で攻めて来てくれると嬉しいよ」

「…？わかりましたそれでは行かせてもらいます」

「ああ来なさい！うふふ、楽しみだ」

零崎双識対匂宮灯芽

― 戦闘開始

歪な兄妹(前書き)

文才が欲しい…

## 歪な兄妹

「うらあぁー！」

「遅いんだよ！」

現在、幽識は屍杭に攻撃を当てる事が出来ていなかった

「何で呪い名のくせに避けれてんだよ！」

呪い名の中でも戦闘をする奴はいたがその実力は素人で殺し名の幽識の攻撃を避けられなかった

しかし屍杭の実力は明らかに素人などと言うレベルではない  
殺し名の幽識の攻撃をいとも容易く避けているのだ

これではまるで……

「殺し名みてえじゃねえか！」

すると屍杭は「くひゃひゃ」と笑って幽識を見た

…逆立ちをしながら

「だって俺、殺死名でもあるんだぜ」

屍杭はそう言うのと飛び上がりそのまま綺麗に着地した

「俺は殺死名と呪い名…匂宮と死吹のハーフなんだよ」

それを聞いた幽識は合点がいったと言う感じの表情をした

「ああ、よーやく理解したわ何であの匂宮灯芽っつー奴が一人でい

たか…お前「おつのみやのつめ」宮瑠芽だろ」

すると死吹屍杭いやー！宮瑠芽は笑みを浮かべた

「ああそうだけ。すげーな俺を死ってるとはな」

「いやー俺も今のいままで忘れてたがな…《失敗作》」

すると瑠芽はその顔から笑みを無くし代わりに怒りをその顔に浮かべた

「ん？おいおい怒ってるのか《失敗作》って言われて？」

「…れ」

「ああ？なんだって？」

「黙れつつてんだよおおおおおおおおおお！」

瑠芽は両手にナイフを持ち自らの腹に突き刺した  
すると同時に幽識の腹から血が噴き出した

「てめえに何がわかる！むか死から《断片集》（フラグメント）から《失敗作》って言われ続けて灯芽からも蔑まれてそれでも認められようとして帰りたくもない死吹に帰ってここまで来たんだ！」

「ぎゃはは、ゆっちーなんか楽しそう事してんじゃん」

不意に誰かの声がして幽識はそちらの方に視線をやったそこには…



ベギッバギボギグチャ

そんな音を出しながら出夢の《一喰い》は瑠芽の身体を破壊していった

「がっ……!!」

そう短く呻き声をあげて瑠芽は血や肉を撒き散らしながら自らの血の池に倒れた  
すると出夢は瑠芽から視線を幽識へと向けた

「さあゆっちー邪魔者も殺ったし殺し合いしようぜ」  
「だからゆっちーとか言ってるんじゃないねえ！」

(零崎幽識対死吹屍杭(匂宮瑠芽) 零崎幽識勝利?)

(零崎幽識対匂宮出夢)

――戦闘開始

「うふふ、なかなかやるじゃないか灯芽ちゃん」

「それはどうも」

双識は愛用の大剣《自殺志願》(マインドレンデル)がないため、灯芽に対してどこにでも売ってる?様な剣で応戦していた  
しかし流石は《二十番目の地獄》とも呼ばれている男零崎双識である  
灯芽に対してそれで応戦していた

「うん、流石はマインドレンデルさんそう簡単には死んでくれませんか」

「当たり前だよ…そう簡単に死んだらアスやトキに何を言われるか」

「アス？トキ？…ああ《愚神礼賛》（シームレスバイアス）と《少女趣味》（ボルトキープ）の事ですか大丈夫です貴方を殺したらその2人も殺しに行きますから」

「ふむ、だったら負ける訳にはいかないね」

そう言うと双識は一気に間合いを詰め鉄を灯芽の首へと向けたしかし灯芽はそれを間一髪ので飛び上がりその凶刃を避けた

「……見えなかった」

「？」

双識は何故か不服そうな顔をしていた

何かいやな感じがしたので灯芽は無意識にスカートの裾を直した

「しかしなかなかやるじゃないか灯芽ちゃん」

「当然ですこれくらいなら殺し名であれば誰だってやります」

「うふふ、そうかい…しかし幽識君は大丈夫かな？」

「戦闘中に家賊の心配ですか…虫酸が走ります」

灯芽が言ったその言葉には明らかに嫌悪感が含まれていた

「家族なんているだけ無駄です屍杭いやばれてますよね…瑠芽なんて無駄どころか邪魔で私の足ばかり引っ張って…さしずめもう殺されてるんじゃないですか？」

「それじゃあ君は家族はいらないと言っのかい」

「はい」

「そうかい、だったら君は不合格だよ」

そう言うなり双識は何かを投げた

灯芽はその投げられた物体を蹴り上げた

するとその物体はものすごい爆音を出しながら爆発した

「手榴弾!？」

灯芽はその爆風で少し体勢を崩してしまった

そして灯芽が体勢を整えたその時には双識が鋏を突き付けていた

「どうやら私の勝ちの様だね」

「…負けましたか、まあいいですよ」

すると双識は少し驚いた顔をした

「君意外とあっさりしてるね今から殺されるんだよ？」

「いいんですよ…まあ少しだけ話しを聞いて貰っていいですか？」

「少しだけならね」

双識は灯芽の喉に剣を向けたままそう言った

「貴方達は正直言つて気持ち悪いです」

双識は何も答えない

「家族は裏切らない？見捨てない？そんなもの今では表でも親が自分の子供をまたその逆も然りですが殺したりするんですよ？血が繋がっていてもそれなのに貴方はそれでも家賊は裏切らないと言っているんですか？」

「そういえば子萩ちゃんにも似た事を言われたっけ…ああ勿論私は家賊を裏切らないよ絶対にだ」

「そうですか」

すると灯芽は呆れたようにため息をついた

「だったらもういいです殺して下さい」

「言われなくても」

双識はそう言つと灯芽の喉に剣を突き刺した

「さて…幽識君は大丈夫だろこんなところで死ぬ様な奴じゃないしな…私は帰るとするかな」

そう言つと双識はすでにもの言わぬ死体となつた灯芽から剣を抜き取つてその場から立ち去つた

(零崎双識对匂宮灯芽  
零崎双識勝利)

(匂宮灯芽―不合格)

歪な兄妹（後書き）

感想待ってます！

## 狐（前書き）

今回はかなり短いです

## 狐

「ああ〜楽しかった！」

いやーあの後白井さんも混じってしゃべってたんだけど…ジャジメント風紀委員  
の仕事があつたはずなんだよなあの人

「職務怠慢してて大丈夫かな？」

そんな事を考えながらふと視界に入ってきた人を見た

「うわあ…なにあれ」

私の視線の先には白い和服を着て狐の面を被った人がいた

正直言つて怖い

そんな事を思つて見ていると狐の面の人がこちらに気付いて歩いてきた

「…………おい」

「なんででしょうか？」

「『なんででしょうか？』ふん。お前、人のことじろじろ見ていてそれはないだろ」

「あのですねそんな目立つ格好してたら誰だつてじろじろ見ますよ？」  
「？」

「『誰だつてじろじろ見ますよ？』ふん。普通は目を背けたりすると思つんだがな」

「じゃあ私は少し普通じゃないって事なんじゃないんですか」

私がそう言ってやると狐の面の人が少しだけ間を置いて私の方を見た

「だったらお前零崎幽識と言う男は知らねえか？」

「……なんでこの人幽識兄ちゃん知ってるの？」

帰ったら幽識兄ちゃんに詳しく聞かないと……とりあえずここは

「知りません」

「……ふん。奴の事だからお前の様な奴には会ってると思ってたんだがな……そういえばお前なんて名前だ？」

「今頃聞きます!?!……木原、木原茜ですよ」

「木原か……お前、げんせい幻生のジジイの孫かなんかか?……ふん。まさかあのジジイとの縁がこんなところで遭うとはな」

すると紅織は憎々しげな顔をした

「誰があのジジイの孫ですか張り倒しますよ。……私はアイツの絶対能力者（レベル6）を生み出すための実験動物モルモットですよ」

「ふん。アイツまだそんな……下らねえ事してたのか」

すると狐の面の男は「面白いなあ」とさして面白く無さそうな口調でそう言ったあの……一応、絶対能力者（レベル6）を作る事は学園都市の科学者達の夢ですよ？それを「下らねえ」といいましたよ！

「そーいえば…狐さんはあのジジイのなんなんですか？」

「『あのジジイのなんなんですか』ふん。ただの研究仲間だったと言っただけだ」

すると狐面の男はそのまま歩きだし紅織もそれに付いて歩きだした

「俺は一時期、超能力に興味があつてな…学園都市で幻生と研究してたんだよ。まあアイツは家族を実験動物にしてまで絶対能力者（レベル6）を創りたがつたがあいにく俺はその頃には既に興味がなくなつていて他の事に興味が出てきてな俺はここから出たんだよ」

「ふーん」

「これで話は終わりか？」

狐の男がそついうと紅織は「じゃあ最後にひとつ」と言った

「貴方の名前はなんて言うんですか？」

その質問に狐の男は紅織の方を見据えてこう答えた

「西東天…さいとうたかし人類最悪の遊び人とでも言っておこうじゃあな」

『縁が《合えば》また会おう』

裏世界（前書き）

今回も短い…

## 裏世界

「ただいまー」

「おっ、お帰り」

夜7時

紅織が帰宅すると腹から血を出してパーカーを赤黒く染めた幽識が居た

「あああああ！？血だらけえええええ！？」

「どーした血ごときで大声張り上げて」

幽識はそう言うのとパーカーを脱ぎ、雑巾の様に絞ったすると当然…

ポタポタッ

「びゃー……！」

紅織は悲鳴を上げると部屋の隅で青い顔をしてガタガタ震えた  
すると幽識はそんな紅織を見て溜息をついた

「殺人鬼が血にびびんなよ…」

「だってさあ！」

幽識の言葉に紅織は涙目になりながらも憤慨して抗議した

「殺人鬼だつて元は人間なんだから怖い物とか苦手な物があるじゃん！私、血を見ると手に力入らなくなつて足が震えて…とにかく私は血が嫌いだあああ！」

「んじゃあなんであの時えつと…スキルアウト、だっけか？あいつら血ダルマにして殺せたんだよ」

「あー…いやね？零崎してる時は血を見ても大丈夫なんだ」

しどろもどろに答える紅織を呆れるような目で見た

「…まあ今日は深くは突つ込まないが…」

「ん？なんで？」

「殺し名と呪い名と連戦してきて疲れた」

紅織は困惑した顔になった

「殺し名と呪い名つてなに？」

「ああ…言つて無かつたかえーと殺し名つーのは勾宮、闇口、零崎、薄野、墓森、天吹、石凧つー殺すのが専門の家系の事だ。んで零崎を除く家系は対になるように呪い名がいて時宮、罪口、奇野、拭森、死吹、咎凧だ…紅織もし呪い名に遭つたら戦うなこいつらはヤバイ」

「どれくらい？」

幽識は「そつだな」としばらく考えた

「…この学園都市の超能力者（レベル5）とタメ張れるくらいだ」

「!？」

「だから、だ…呪い名と殺し名は滅多な事じゃ一般人は殺さないはずだ…紅織お前は零崎名を名乗るな分かったか」

幽識は腹の傷に包帯を巻きながら真剣な顔でそういった

## 奇野

「にひひ見いーつけた。アンタ麦野沈利…『原子崩し（メルトダウナー）』でしょ？」

ー何こいつ

それが麦野沈利がこの女に抱いた感想だ  
その女は前髪をカチューシャで掻き上げていてダボダボのジャージで身を包んでいるというわけのわからない服装だった

「おつやあ？シカト〜？悲しくなっちゃうけどねえ〜…」

「アンタみたいな奴には関わりたくないから普通は無視するんだけど…」

「にひひそんな言われると俺、どMだから興奮するだけよ？」

その女はそういうとナイフを構えた

麦野はその女になぜか警戒心を抱かずにはいらなかった

多分この女は無能力者（レベル0）だろう

そう思っただけでも警戒心を解く事が出来なかった

「それじゃあいつくぜええ！」

女はそういうと麦野に突っ込んで行った

しかし麦野はこれをおろそかに避けて女は勢い余って派手に壁に激突した

「なんだ素人じゃ…」

麦野はその女を尋問しようと手を伸ばしたが次の瞬間猛烈な倦怠感に見舞われた

「…うつ…」

「やつりいー『原子崩し』ゲットオ〜」

「アンタ…一体…」

するとその女は「おお」と手を叩き少し申し訳なさそうに麦野をみた

「ごめんごめん名乗って無かったわ〜…俺の名前は奇野<sup>きの</sup>偽<sup>いつ</sup>知なのよ  
〜…宜しくねえ？」

偽知は意識が無くなりかけてる麦野を肩に担ぎ上機嫌な顔で歩きだした

「やっぱり裏世界の住人じゃないから隙がありだね〜…まっあの『離反囚』の零崎討伐に行った匂宮兄妹がこの女を相手したらすぐ殺られちまうと思うが…」

〜

「ん？電話？」

偽知はそういつと麦野の携帯に勝手に勝手に出た（よいこは真似しちゃ駄目よ〜）

『むねの…』

「ざくんねくん俺は麦野沈利ではないです」

『…誰？』

「アンタらのリーダーを攫いに来た病毒遣いつて者です」

偽知は「じゃね」と電話の相手に言いそのまま通話を切った

「にひひこいつ助けに仲間来るのかなあ？」

「俺、どMだから来られれば来られるほど興奮するだけよ」などと  
呟いていると

「君…あの匂宮の事なにか知ってるのかい？」

偽知がその声に振り向くとそこには『自殺志願』——零崎双識が立  
っていた

「げえ！？マインドレンデル!？」

「君の話しを聞いてたんだけど…どうやら私達を狙ったあの匂宮と  
何か関係があるみたいだね」

双識はそういうと鋏を構えて偽知にその鋏の先端を向けた  
偽知はそれを見て——

「にひひ…ここは逃げるが勝ち！」

全力で逃げ出した  
しかも双識に麦野を投げつけて

「おっと！」

双識は投げられた麦野を難なく受け止めたが偽知は既に目の前から消えていた

「ったく…呪い名のくせに速いね…」

双識はそういうと気絶している麦野をおぶって廃ビルへと帰った

「ただいまー」

「お帰りって何連れてきたあああ!？」

幽識は帰って来た双識にそのままドロップキックをかましたがやはり双識はそれをかく避けてしまう

「幽識兄ちゃん？誰その人」

「ん？君が紅織ちゃんか！はじめまして私は零崎双識、君のお兄ちゃんだよ」

双識はその少女が妹だとわかるや否や満面の笑みで紅織に話しかけた

「お兄ちゃん？」

ちなみに紅織はこの状況についていけてなかった

「うふふいいね！いいよ紅織ちゃん！さあもっと『お兄ちゃん』と言ってくれ！」

「黙れ変態」

その言葉と共に双識に幽識は膝蹴りを食らわした

「ね、ねえこの人が零崎双識…家賊の一番上のお兄ちゃんなんだよね？」

「んー？まあな」

幽識はそういつと双識が連れてきた麦野に目を向けた

「こいつは…双識兄貴こいつ奇野に会っちまったのか？」

「うん名前はたしか…奇野偽知だった」

「ひえ…」

幽識は奇野偽知と言う名前を聞いた途端なにか気持ち悪い物を見た

ように顔をしかめた

「あいつか…」

「どうしたんだい？その奇野になにか心当たりでもあるのかい？」

「いや…その奇野、俺の知り合いなんだよな…」

すると双識は少し考えてなにか思い出したかの様に手を叩いた

「ああ！奇野偽知ってあの子か！うんうん思い出したたしかアスが言ってたね…幽識君の「わー！わー！わー！わー！」」

双識の言葉を遮る様に幽識は大声を張り上げた

「兄貴それ以上言ったら殺す！ガチで殺す！」

「いいじゃないか幽識君！別にあんな事誰だって経験するものだよ」

「うつせえ！普通は経験しねえよ！あんな事！」

幽識は頭をグシャグシャと掻きながらそう叫んだ

「ねえ二人とも聞きたいんだけど…」

「ん？どうしたんだい紅織ちゃん」

「えっとこの人どうするの？」

紅織はそういうと横になっている麦野を見た

「ああそいつ?…兄貴もと居たとこ捨ててこい」

「幽識君いくら何でも酷くないかい?」

「まあ冗談だ…別に医者に連れて行くほどの病毒じゃないが…ん〜  
どうすっかな」

「殺つちまうか?」と言う発想に至ったが相手は貴重な超能力者（レベル5）、殺したあとの処理などが大変なので幽識はこの考えを捨てた

「まあこいつの知り合い捜してくるついでに偽知も捜してくるわ」

幽識はそういうと麦野を担いで外へと歩いて行った

## 奇野と零崎（前書き）

今回は許可を貰ったので一条ツカサさんの小説「零崎夕識の人間生活」から夕識が出て来ます

一条ツカサさん、ありがとうございます！

## 奇野と零崎

「んでさー兄貴の持ってきた面倒事処理しなくちゃならなくなつてさ」

『大変だねそつちも』

「んーまあな？」

幽識はそついいながら橋の手すりの上を曲芸師の様に歩いていた  
因みに麦野をおぶっているので少し前屈みになっている

「今は学園都市の能力者の資料とかとつて来るっつー依頼受けてるからさそれに比べりゃ楽」

『誰に頼まれたのそれ』

「《暴君》だよ《暴君》死線デッドブルーの蒼でお馴染みの」

『ああくなぎーからなんだ』

「おつつてかそんな事俺に頼んでくんの《暴君》くらいしかいねえだろ」

「いやくなぎー以外にもいるよそー言う事やらせる人」

「おいおい冗談キツイぜ夕識いくら何でもそんな奴いるわけねえつて」

『いや潤さんならやるよ絶対』

「潤さん？」

幽識は何処かで聞いたことのある名前思い出そうとしたが残念な事に思い出せなかった

『人類最強って言った方が分かるかな』

「人類最強……………ああ！人類最強！思い出した哀川潤か！」

『うん』

「お前すげえな人類最強と知り合いか」

『まあいろいろあってね』

「お前も変な奴に好かれるな類は友を呼ぶってか」

『アンタだけには言われたくない』

「酷っ！酷いな夕識！俺零崎の中でも大分まともなのに！」

『……………零崎した後、人肉食べる人がよく言うよ』

夕識は電話の向こうで溜息をついて何か思い出した様に口を開いた

『幽識そーいえば人兄しらない？』

「ああ前に会ったたしか京都に…」

「ゆーしき…！」

「ゴフツ！」

『どーしたのいきなり！？』

「わりい最優先事項が出来た」

そういつと幽識は携帯を切ってそのしがみ付いて来た女を蹴り飛ばした

「きゃうん…！」

その女は蹴り飛ばされてコンクリートの上を無防備に転げてかなり痛そうな音を立てた

「な〜ん〜で〜しがみ付いてきた？いきなりしがみ付いてくんなくてえいつたはずだよな？」

「ああ〜幽識をみるとしがみ付きたくなるのよーよって幽識が悪い」

幽識は偽知の頭を踏みつけた

「まあいいてめえにはいろいろ聞きたい事がある」

「ああその子の事？その子はねえ《原子崩し（メルトダウン）》の麦野沈利だよ」

偽知はそういいながら幽識の足から抜け出した

「そんな事聞きてえんじゃねえよドM女」

「失敬な！幽識の時だけはドSだよ！？」

「いつも思うが何でだよ！何で俺ん時だけドSになるんだよ！」

「いーじゃんいーじゃん幽識いじめがいあるんだから！私達、否定  
姫と左右田右衛門左衛門そうだえもんざえもんみたいな関係でしょ？」

「あれはいじめてんじゃねえ主従関係だ主従関係」

ここから二人の刀語談話が始まるのだが割愛させていただきます

「さて本題だが偽知誰に頼まれてこの娘攫ってきた？」

「えー？それは言えないなあ」

「…どうしても言えないのか」

幽識は偽知の頭を手でわしづかみして握っている

「痛いよー…あっじゃあね幽識にキスさせてキスそれだったら言っ  
てもいいよー」

「断る」

「えーそんな事言わないでよー私達×××で×××した仲じゃない  
それに比べればキスなんてさ？」

「あれはお前が病毒で無理矢理してきたんだろ？」

「えーでも幽識途中から私の事押し倒したじゃない」

幽識はそれを聞いて顔が真っ赤になってしどろもどろになった

「あれは…その…なんだつい」

「ムラムラして？」

「……」

「あれえ〜否定しないのね〜？やっぱり幽識も男なんだねえ〜？」

「ぐっ」

「いやーあの時の幽識は可愛かったねえ ×××で×××に×××だったもんねー」

「ぐはっ」

「幽識って意外と×××だったよねえ」

「うはあ」

すると偽知は「あはは」と笑って立ち上がった

「今日はこれくらいねー？また今度遊びにくるよー。…あっそうそ  
うその子はそろそろ目え覚ますと思っよー」

「そうか…じゃあこいつ此処に置いて帰っていいか？」

「目え覚ますんなら」と幽識が言つと偽知は額に手を当てて幽識にナイフを投げつけた

「あぶねっ！」

「こんな所に女の子置いていっちゃダメその子可愛いから悪い男達に攫われちゃうよ？」

「大丈夫だつつのこいつ学園都市暗部のリーダーなんだぜ？」

「でももしも、って事があるでしょ」

「…お前こいつ病毒で気絶させといてよく言つな」

「…ん」

「あつ起きたみたいね」

「は？」

幽識が後ろを向くと目を覚ました麦野と目が合った

次の瞬間麦野は偽知を見つけるや否や飛び掛かった

「この女！一体さつき何したあ！」

「あはは！じゃあね〜幽識また明日〜」

そう言つと2人は何処かに行つてしまつた

「…帰る」

幽識はそう呟くと廃ビルに帰宅した

奇野と零崎（後書き）

夕識ってこんなでよかったっけ？  
感想待ってます

## 魔女

翌日

「ZZZ…」

「うふふ幽識君がこんなに寝てるなんて久しぶりだね」

「そうなの？」

「うん、幽識君ってどれだけ遅くとも大抵7時頃に起きるんだけどね…さては偽知ちゃんに会ったね」

「双兄ちゃん、昨日から言ってる偽知って誰？」

「呪い名の奇野だよ。そして彼女はその中で稀に生まれる《ボイズンマウス病毒支配》と呼ばれてるんだけどね…まあ幽識君の彼女みたいな感じだよ何回も家に来てたしね…でも私の料理食べた後、私を見ると脱兎の如く逃げたりして私はもう5年くらい見てなかったからね昨日見た時、思い出せなかったんだよ…しかしなんで逃げたりするのかな。私、何かしたかな？」

まあ確実に双識のカレーが原因なのだが…唯一この中で不味さを知っている幽識が睡眠中なのでそれに答えられなかった  
因みに偽知はこの時からカレーを食べれなくなった

「そーいえば紅織ちゃん…得物は持っているかい？」

「ナイフだけなら…」

そういうと紅織はジーンズのポケットからバタフライナイフを出した

「これじゃあ駄目だよ紅織ちゃんこういうナイフは脆いのだよ？」

「でもこれしか持ってないし……」

「それじゃあね幽識君に買って来て貰おうか…幽識君起きろー」

「…ふあ？」

幽識は寝ぼけながらも起きた

「紅織ちゃんに何かナイフでも買って来てくれない？」

「こんな学生ばかりの何処にナイフなんか売ってんだ考える」

そういうと幽識はまた布団に潜り込んだ。すると双識は幽識を布団から引つ張りだして幽識に鋏を投げた

幽識はその鋏を受け止め、不機嫌そうな顔で双識を睨み付けた

「おいドグサレ兄貴朝からなに投げてくれてんだよ。おお？」

「やっと起きたかい幽識君」

「そりゃ鋏なんか投げつけられりゃ誰だつて起きるわ」

幽識は渋々立ち上がると《捕食願望》を構えた

「ちょ！幽兄ちゃんこんな所でチェーンソー振り回さないで！私も巻き込まれるから！うわあああ！？」

殺人鬼達の朝は騒がしい

「くそつ朝から兄貴に鉄投げられたり紅織に説教されるとかたまつたもんじゃないぜ」

幽識はそういいながら今日も学園都市の超能力者のデータを手に入れる為、喫茶店でノートパソコンをしていた

「〜」

「久しぶりね！」

仕事が順調に進んで鼻歌を歌っていた幽識は心底驚いたと言う様にその声の主を見た

「おいおい、何でアンタがこんな科学ばかりの所にいるんだ？…ラムダデルダ卿」

「何よー！！折角遊びに来てあげたのにその言い方はないでしょー！」

そのラムダデルダと呼ばれたピンクの服で身を包み込んだ少女はそんな反応をする幽識に不満を持ち大声をあげたが幽識は軽くスルーした

「アンタと遊ぶと本当に死ぬ気しかない…ってかベルンカステル卿はどうしたんだよ」

「それがベルンに最近会えてないのよベアトもぬるいゲームばっかしてるし…だ、か、ら暇潰しにアンタんところに来たってわけ」

「素敵な迷惑をありがとう、出来ればそのまま帰って頂くと嬉しいです」

「嫌よ」

「……でしょうねラムダデルダ卿がこれだけで帰る訳ないですよね」

幽識は何処か諦めた様な顔でラムダデルダを見た

「しかしラムダデルダ卿も酔狂ですなこんな一介の零崎の所に遊びにやって来るとは」

「だって面白いじゃない…魔女でも魔術師でもないアンタが私に匹敵するほど魔力を持つてるのよ？」

「でも俺は魔術なんて一つも使えませんよ」

「だ、か、ら私と勝負してもらったためにこのラムダ様がアンタを直々に鍛えてあげるの感謝しなさい！」

「本日二回目の素敵な迷惑をありがとう」

幽識はこの時「俺、学園都市で死ぬかも」と思ったとか…

「まあアンタの零崎が見たいってのもあるけど」

「あれは見せ物と違いますよ…?」

魔女（後書き）

タグにうみねこ入れなきゃ…感想待ってます！

## 幻想御手1

「んで？ラムダデルダ卿何処に行くんだ？」

「いいからついてきなさい」

幽識はラムダデルダに服の袖を引っ張られ、その後を追っていた

…見た目的に少女に引っ張られる大人という構図になっているので  
おかしな光景になっている

「ついたわよ」

「え…何処だここ」

ラムダデルタにつられて来たそこは幽識が知らない場所だった

「どこでもいいじゃない…さっ早速魔法の練習よ」

「はいはい分かりましたよ」

幽識はそういつた瞬間何かを察知しラムダデルタの口を塞ぎ物陰に  
隠れた

「むぐっ！」

「静かに」

幽識が声を潜めて様子を見てみると三人のガラの悪そうな男達と太  
った男が廃ビルに近付いてきた

すると太った男が金の入った袋を取り出し、ガラの悪そうな男達に

渡した

すると男達は太った男に何かを言うと太った男はいきなり叫んだ

「そんなつ話が違うじゃないかつ！10万で『レベルアップ幻想御手』を譲渡すると言ったじゃないか冗談はよしてくれ」

すると男が歯を剥き出して笑い太った男に視線を向けていた

「悪いがさつき値上げしてね」

太った男は勿論そんな事に納得せず、掴みかかったが逆に蹴られていた

「殺してえ」

そんな事を思いながら見ていると一人の少女がその様子を見ていた

(あれは…佐天ちゃん!?)

すると佐天は不良に見つかってしまいあっちに行ってしまった。

俺がその一部始終を見ているとラムダデルダが顔を赤くして此方を見ている

俺は口から手をはなしてやるとラムダデルダは少し咳き込みながら此方を睨んだ

「あんた！今窒息しかけたわよ!？」

「待て！大声なんか上げたら…」

案の定、不良達が此方に歩いて来て俺を睨んできた

「んだよオッサン何見てんだよ」

ああ面倒、こいつらこんないきつてるとかただウザい  
俺は自分で作った蠅螂の仮面を被り服の中にある《捕食願望》の持  
ち手に手をかけた

「ああ？何、ふざけた仮面なんか付けてんだよ？」

幽識は不良の言葉を完全に無視して、《捕食願望》を取り出し、歯  
を回転させた

「それでは零崎を始めよう」

そうつぶやくと《捕食願望》で不良の心臓を突き刺した  
そして不良から抜き取り血がべっとり付いた《捕食願望》をもう一  
人の不良の首に振り下ろし、肉を削っていった  
この間、僅か数秒。

「あとは…お前か」

幽識がそういつて次の獲物に視線を向けるとリーダー格の男は廃ビ  
ルの中に入っていった

幽識は獲物を追撃する為に廃ビルに入る前に、さっき殴られていた  
太った奴を見たが、どえやら気絶していたので生かしておく事にした

「さて…風紀委員シヤジメンが来る前に奴も始末しなきゃなあ…」

幽識は仮面の下で心底嬉しそうに舌なめずりすると廃ビルの中に入  
っていった

## 幻想御手2

「…薬中、待ちやがれえええええ！」

俺は現在、薬中を追って廃ビルを駆け回っていた  
何故、追いつけないか？

理由は簡単…あの薬中がこの廃ビルにやたらと精通しているからだ  
相手はこの廃ビルを隅々まで知っていて、隠れる場所や通りにくい  
場所を完璧に網羅していると言ってもいいほど詳しいのだが、それ  
にたいして俺は全く此処の構造を知らない

しかもどうやらアイツは光を屈折させて、コチラの目を誤魔化した  
りしてくる能力らしい  
お陰で、追いつけないしイライラも蓄まってくる

「あんの薬中…捕まえたらバラバラにして元がなんだったか、わか  
らなくしてやる」

そんな感じに悪態つきながら走っているといきなり頭の上にラムダデ  
ルタが乗ってきた

「つたく、あれくらいの奴、魔法使えば楽に殺せるのに」

「うつせーな…んじゃ、なんかこつ…なんか召喚する魔法でも教え  
ろ」

するとラムダデルタは口角を楽しそうに吊り上げた

そして俺に呪文の様なものを耳打ちしてきた

それじゃ零崎はそいつに任せるか…

俺はそう決めると呪文を唱えた  
しかし、出てくんのどんな奴だ？

（カカカ、あの殺人野郎は上手く撒いたな。残念だったな、俺はこ  
のままとんずらさせてもらっぜ）

幽識から逃げていた不良はビルの三階で息を整えると階段を降りは  
じめた

その顔には仲間が死んだことなど、どうでもいいと言つ様に悼む様  
な感情は一切見られず、ニヤニヤ笑っていた

その不良が暫く歩いていると不意に後ろから発せられている殺気に  
振り返った

するとそこにはなにやら赤い服を着の上にはおったツインロール  
？の少女がいた

「きゃはは、獲物はっけーん」

そのツインロールの少女はさういうと不良に一気に近づいた  
不良は自分の能力を使い、自分の虚像を違つところに見せた

「イタダキマー…って、あれ？」

その少女は虚像の方へ突っ込んでいた  
しかし…

「きゃはは！逃がさないよ！」

その少女は向きを変えると突然、杭になり、不良に向かって行った

「く、来るな…うわああ！」

その杭は不良の心臓を貫くと再び少女の姿へと戻った

「うわーマズっ！…やっぱり薬やってるヒトは駄目だ」

そういうと少女ー暴食のベルゼブブは無数の蝶になり、何処かへ飛んでいった

（あれからどうなったのかな？）

佐天はさっきまで不良達がいたところに戻っていた

（って何戻ってんだろあたし…見なかった事にしたかったのに…）

佐天がさっきまで隠れていた場所まで歩いていくとそこには、珍妙な被り物をして白衣を着た男性がいた。

佐天はその男性を眺めていると男性が佐天に気付いた

「およ？あなた誰なのですか？今、此処立ち入り禁止ですよ？」

男性は子供の様に首を傾げると、佐天に語り掛けた

「え？いや…あの」

「今、此処凄く危険だからね。早く帰った方が身の為ですよ？」

そういうとその男性は携帯を弄り出した

しかし、男性は「思い出した！」と叫ぶと佐天に質問をして来た

「そつういえばなんですけど…貴女、レベルアップ幻想御手って知りませんか？」

「幽識様ー言われた通り殺して来ましたよー」

「ああサンキユ…で？味どうだった？」

「もぉー最悪ですよー。薬やってるから物凄く不味かったですよ！」

ベルゼブブがそういうと幽識はポケットから飴を出してベルゼブブに投げつけた

「キャッホー！飴ちゃんだー！」

ベルゼブブは飴を貰うとぴょんぴょん跳ねて喜んでいた

幽識はそれを暫く眺めていると隣にいたラムダデルタに飴を差し出した

「いります？」

「ありがたく貰っとくわ」

ラムダデルタは飴を貰うとすぐには食べず、ポケットにしまった  
幽識はそれを見届けると背中から《捕食願望》を取り出すとこびりついた血を削り取り出した

暫くしてラムダデルタは幽識に質問した

「そーいえばアンタってなんでそんな得物使ってるのよ？アンタの  
師匠、釘バット使ってるんでしょ？」

「別に師匠が釘バット使ってるからってチェーンソー使ったら駄目  
って誰が決めた？」

幽識はあらかた血を削ぎ落とすと《捕食願望》をしまった

「第一、打撃の武器は物に当たる度に振動来るからつれえーんですよ」

幽識はそういうと立ち上がり、廃ビルを降りた

それをベルゼブブが後ろから着いていき、そこにはラムダデルタだけが残った

「…やっぱりアイツ昔より少し甘くなってるわね…まっ、ベアトよりは見てて楽しいけど」

そういうとラムダデルタも蝶になって何処かへ消えていった

## 人類最厄

「え…」

いきなりの質問に佐天は固まってしまった

何故なら彼が口にした『幻想御手』レベルアップ…

それは彼女が持っている音楽プレーヤーに入っているのだ

（もしかしてこの人も…）

『幻想御手』を狙っているのかと佐天は思ったが…

「あれって美味しいんですか？」

その言葉に佐天はよろけてしまった

「大丈夫ですか!？」

「ああ…大丈夫です」

そういつてなんとか体勢を整え、その男を見た

「それは良かった」

その男は安堵の表情を浮かべて胸を撫で下ろしていた

「あー…その、私帰っていいですか？」

佐天がそう言うと男は余りにも邪気がない笑顔で「いいですよ」答

えた

「それじゃあ…失礼します」

「お気をつけて」

男は佐天に手を振り、去つたのを確認すると弄っていた携帯を閉ま  
つた

「すみませんね…表の住人には見せられないんですよ」

その男が佐天が歩いて行つた方向とは逆に歩いて行くと細切れにさ  
れたさっきの不良達がプカプカ浮かんでいた

「うふふ…なんと美しいのでしょうか。」

その男は恍惚とした表情を浮かべて、その光景を眺めていた  
この男の名前は木崎乱愧きさきらん愧

《人間最厄》、裏の世界でそう呼称される殺人狂である

「おや、貴方も来られていたのか…」

「…何…してい…る？」

「おや、時雨しぐれさんに羽衣はころもさんじゃないですか」

乱愧が振り向くと身体にチエーンを巻き付け、着流しをきた二十代  
後半の男と黒いつなぎを着て、キャップを深くかぶつた女がなんの  
気配も出さずに立っていた

「何をしていたってこの美しい《芸術品》を見ているのですよ」

「…趣味…悪…い…」

「美しい《芸術品》か…我には同感出来んな」

羽衣と時雨の言葉に乱愧はひどくつまらなそうに溜息をついた

「ふう…貴方達にこの芸術を理解してもらうのはやはり無理ですか…」

乱愧はそういつて携帯を取り出し、写真を撮った

「では、そろそろ準備に入りましょうか…殺人鬼はこの世界に私、一人だけで充分です」

乱愧はそういつて高らかに笑った。

人間では無いなにかのような不愉快な声で

「で？どうして狐さんは此処にいるのかな？」

「『どうして此処にいるのかな？』ふん、居たら何か悪いのか？」

「おお悪い」

「幽識様―誰ですか？こいつ」

ここはとある喫茶店、そこで俺と狐の面を被った男、西東天、そしてベルゼブフが向かいあって座っていた

「…いつからこんな趣味になったんだ、幽識？」

「別に趣味じゃねえよ、使い魔みたいなもんだよ」

狐さんがベルゼブフ見てそんな事をほざいてきたのですぐに否定してやった

「…にしても相変わらず女々しいな狐さん？死んだ奴の仮面を被り続けるなんてよ」

俺も売り言葉買い言葉でそういつてやった

「お前が着けてるその首飾りよりは女々しくないと思うがな」

「言ってくれるじゃん」

俺は頼んでたコーラを一気に飲み干した

緊張するからかどうもこいつと話していると喉が乾くな…ごめんなさい嘘です、ただコーラが好きなんです。子供っぽいなんて言わないで

「しゃーねーだろ、この首飾りはアレだうん、死亡フラグ立てちまった時に俺を助けてくれるかも知れないし」

「首飾りがそんな死亡フラグを防げるか」

「防げない事は無いと思う！…多分」

「多分かよ」

狐はそういつて俺の前に資料を出してきた

何やら小難しい事が書いてある

「俺が此処で研究していた時の超能力者の資料だ…やるよそれ」

「…は？」

いまなんつったこの人！！くれるってえ？なんで？…いやだ何か怖い  
「…何か他意があるでしょ？」

「まあな」

そういつて俺は後ろに椅子を引いた

「俺の身体は嫌です！あげませんよ！」

「いるか！んなもん！」

一応、ボケたつもりだったのだが、狐は本気で否定してきた  
…ビックリした…まあ欲しいって言われてもどん引きだけだな！

「まあなんだ、所謂、謝罪みたいなもんだ」

「謝罪…？」

「本来なら俺が敵にしようとしていたのはお前じゃ無かった」

「……………はい？」

え？んじゃ、俺が出夢に狙われた意味って…

「無かった、という事だな」

「……ハアアアアア!?!」

「いやー、悪い悪い」

「悪い悪い、じゃねえよ! え? んじゃあ俺、え? あ、駄目、頭混乱してきた」

ちよつと状況整理してみよう

出夢に狙われたのは意味はなくただの間違い、それで本気で死にかけた

…

「この野郎!!」

「随分と短い状況整理だな」

「ほつとけ!」

一発殴る! そういつて俺は逃げる狐を追いかけた…しかし意外に早いな狐!

## 人類最厄（後書き）

すいません、モンハンのやりすぎと新しい小説の執筆で大分遅れ  
ました…

これからも更新は亀を通り越して、蛞になるかも知れませんがよ  
しくお願いします！

PV?が7万越えてた…

**魔術師（前書き）**

最近用事とかいろいろでなかなか投稿出来ませんでした！

ではどうぞ

## 魔術師

最近思うことがある

匂宮雑技団の《功罪の仔》バイプロダクト 匂宮出夢

《人類最悪》の西東天さいとうたかし

《絶対の魔女》ラムダデルダ：はつきりと言ってこの三人かなりめんどくさい、出夢は襲って来て、西東は出夢をけしかけ、ラムダデルダは暇だと言う理由でなにかしらちよっかい（下手すりゃ死ぬ）をかけてくる…正直、《暴君》の依頼をほつり捨てて帰りたいいや、西東からもらったんだけどさー、でもなんか釈然としないじやん？言ってみれば人がやってたプラモを勝手に完成させられるとか…そつえばそろそろフラジールのV・I・出るな…つと脱線しかけたな

まあそついう、人の苦勞をちやぶ台返しのようにひっくり返して台無しにするようなそんな不届きさ！

まさに下衆の極みっ！…まあそこまでじゃないんだけど…とにかく、何か嫌なんだよ、他人に仕事とられんの！

「聞ってる！？（泣）」

『あー、聞ってるっちゃ聞いてるっちゃ、で俺に何しろと？』

「せめて…せめて…双識兄貴を説得して帰らせて！」

『…ちよっと待て、幽識…なんでレンがそつちにいる？』

「軋兄い、口調口調」

『まずっ…で？なんでそっちにいるっちゃ？』

「学園都市の中学生ナンパしにきたんだと」

『んなわけ…いや、あるっちな、レンならあるっちゃ、というよりそれしかないっちゃ』

…軋兄、そこまで断言するか…

まあ双識兄貴の主食は女子中学生みたいなもんだからなえ？それ危ないんじゃないかって？

殺人鬼なんかしてももう危ないもくそも無いだろ？

「まあ来れたら来てほしいんだよ…なんかきな臭い集団も動いてるし」

『きな臭い集団？』

「どうやら零崎をいろいろとかぎまわってるらしい…こりゃ、もしかして『戦争』が始まるかもな」

…『小さな戦争』みたいなのっちゃか？』

「ああ、しかも呪い名も動いてる…まあ早い内に芽は摘もうと思っ  
てんだが…いかんせん情報があまりにも少ない…」

『で？俺に情報を集めろって言いたいっちゃ？』

「ああ、出来ることなら首謀者も見つけてほしい」

軋識は暫く思索したあと、重い口を開いた

『わかったっちゃ、首謀者の特定は難しいが、やってみるっちゃ』

「サンキュー、いい情報を待ってるぜ」

『了解っちゃ、そっちも《暴君》の仕事、終わらせるっちゃよ』

そついつて軋識は電話を切った

さて…軋兄にも頼んだ、曲兄は…動くわけないか

「さて…この学園都市で始まる謎の集団と零崎の戦争、生き残るか、殺されるか…競争の始まりってか？…おもしれえ…」

「で…格好よく(?) 決めたのはいいが…この状況はやばいなあ…」

「……………」

現状況、なんか髪の毛の赤い人に零崎の現場思いつきり見られました  
どうしよう…「俺が来たときにはもう…」と言おうとしても手には  
血塗れの得物、「お、俺じゃない！」と言おうとしても服にべった  
りと血がついている

…やっぱり殺すしかないよなあ…

…でも、さつき普通に飯食って腹一杯なんだよなあ…

「…零崎だね？」

どうしようかな、俺、ト コと同じで食べる物しか殺さねえ様に心掛けてんだが…

「…おーい？」

どうしようかな…よし、逃げよ…

「魔女狩りの王（イノケンティウス！）！」

「どわっは！？」

なんか出て来てた！炎の擬人化みたいなんが居るんですけど！？

「さつきから無視とは…零崎は礼儀がなってないのかな？」

「いきなり擬人化炎出してくるあんたよりは礼儀はなってると思うんだがな？」

外では冷静装ってますが内心バクバクです、今の当たってたら、上手に焼けましたどころか、消し炭になってたよな…

「まあいい、僕も用事があるんでね、早く決めさせてもらおうよ」「

「用事があるなら俺を見逃して、どっかに行つてはくれませんか？」  
「嫌だよ、零崎を放つておけば、次々に犠牲者が出る…この学園都市の奴等を助けてやる義理は無いけど、君には此処で死んでもらうよ」

…俺を殺す？…零崎一人、殺せば後から後から報復に来るのにな、  
もしかしてこいつ…零崎全員相手にするつもりか？…まさかな、こんな一介のプレイヤー…が常識兄貴に勝てるはずがないし…って何俺が死ぬ事前提なんだよ俺…死んでやるつもりは無いのに…

よし…

「サクツと零崎を開始しよう…と思ったけどやっぱりしんどいからやーめた！」

「え？…うわっぷ！？」

顔面に塩胡椒ぶっかけてやりました  
いや〜マジ傑作だね、くしゃみが止まらないよ  
…さて帰ろう

「ま、まで…ぶえくし！…」  
待てと言われて待つ奴はいませんか？

そのまま幽識はくしゃみで苦しんでいる魔術師、ステイル「マグヌスの隣を通過して行った

因みにステイルはこの後数十分くらい、くしゃみが止まらなかった

そ  
う  
な

魔術師（後書き）

ステイルさん…どうしてこうなったのか自分でもわかりません（笑）

感想、もしこうしたらいいよ、とか、もう少し此処をこうしたら良くなるかも、と言う事がありましたら遠慮なく書いてください

荒らし以外には耐えられるメンタルは持ってますので（＾皿＾）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2108/>

---

零崎幽識の人間捕食

2011年8月18日00時29分発行